

仙代款實錄全

特42
800









1568

伊達



奥の初の大守伊達義宗と
申す流し臣下とありまみ上と
敬以取明君不渡りま
義宗公の叔父君
伊達兵部少輔と
申すの
職原田
甲斐と
合せ大
守義宗
を押
つげ如何
もして
本家と。

ぬ金づくふ及び悪人
江戸上せ中も渡辺金兵衛
のの良
横



○公とくの新
原町の悪野通いと
始めせとのと
名高き三浦屋
の高屋と大守の
相手とをし遂
魔道(引)入
越度(引)入
五才の龜千代と家督と
分家の田村と守と兵部
見職とあり然る小國家者伊達
との大忠臣早も悪人原の手術と
娘ある浅岡の局と江戸上と君の御身の上許
とて龜千代君の乳母と松前鉄之助といふ勇
士らとて君と守護させりしとて悪人なる
二人と遠きけんと浅岡と鉄之助の不きせと

和助

神浪



階へ入る
鉄之助の藝
居申付り
身小覚る
濡衣を乾も
術さし
ふれと斯て
止る悪人
も我が居ら

知まど鉄扇一本共
夜に御寝所の床下へ



忍び行き景あつ
電千代君の御身を
守りて宿直をす
忠美の心や
頼りける斯て兵部
の家へ抱置一節
荒浪梶之助鳴神
峯を門
のかり今荒木和助
神浪三左エ門を
呼出し今夜奥御殿
電千代と刺殺し
舞ての大望成就
の血祭り二人の
うち一人を引
谷谷と
我宗公

引ふ
荒木
和助が
當りしや
支度あつ
夜不寐まよ
たへと刃ひりぬ

奥庭内夜も
更て刃満の鐘
無
常の音さし
四方



○暗の荒木和助が忍びの刺客御殿の縁側手成掛て上らんとする所を斯あゝと兼てより待たる



ひつりカキと
幽く小唄ある夜廻りの
評子木の音も
遠き月ハ何せ
悪人の雲か捲き
形ちさく真黒出立の
後頭巾腰小刀
をさきんたるたん
ひつり
と引き
抜き
小提げ
まのび
あつる
別人をす
怒り眼もろの



鉄之助が帯際として引き戻すと此方も曲者すまじく折て掛ると身をよじり丁と撃つる鉄扇の腕のさぶ曲もの眉見と討きてたゞとまらぬ一打と取て押へ忽ち繩とを掛つてけの△△△の原田が屋敷の場西後見隠忍守と兵部とが引きて今来る松前鉄之助と生捕の荒木和助と引提しおまき○

和助

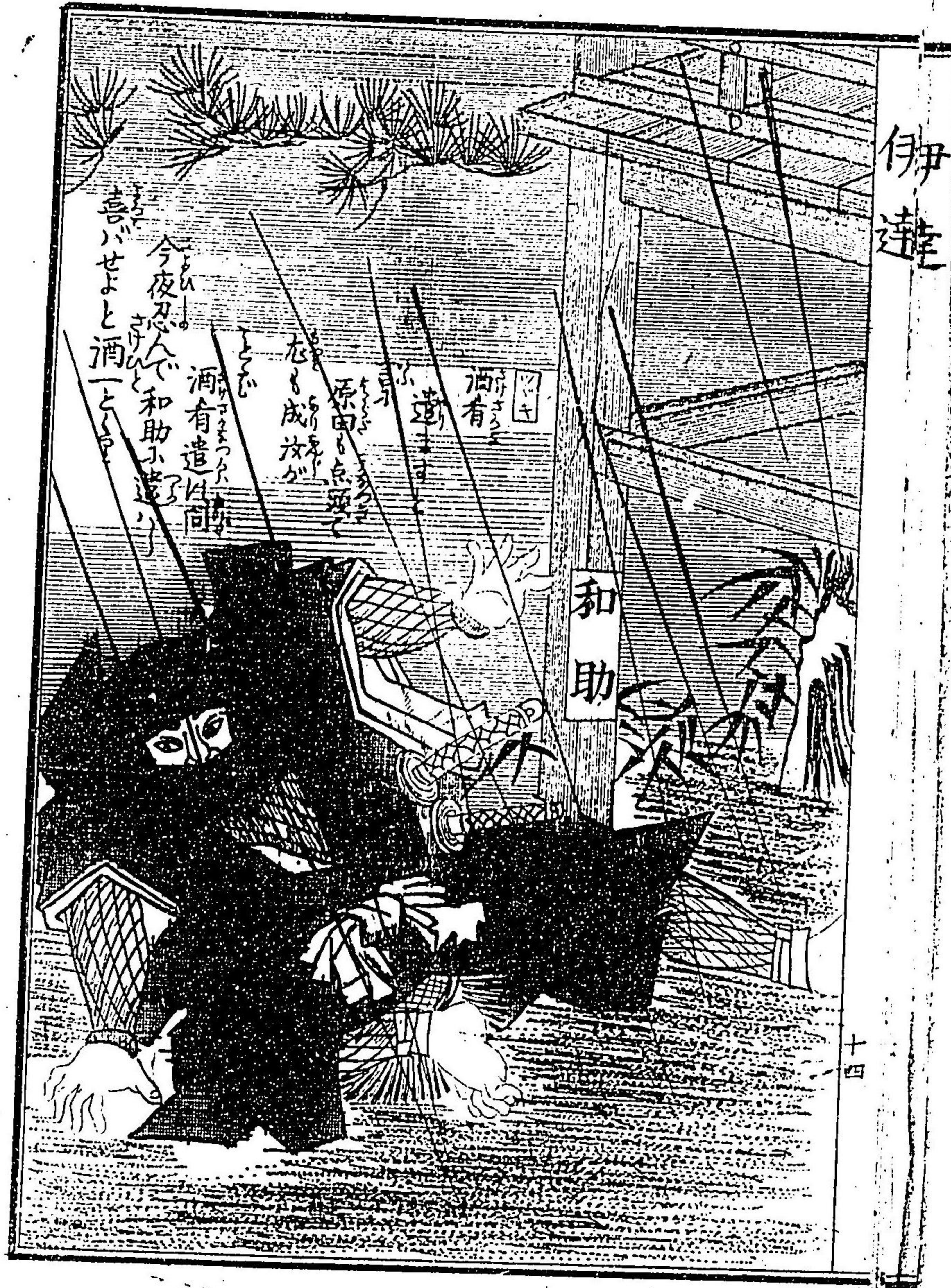
伊達



此は汝何故若君の御寝所間近く忍入りて
 真直白状せよと云ふ和助ハ老く教皆様も
 御存の元の名の荒浪もよるを知らずの浪人金に
 困り出来心御手許金を盗み入りしはしき事
 外は仔細いさすと言はせしむる鉄之助が
 鉄扇も奇責の杖高陳を九八斯して
 せん目小物又せん馬を馬の拍柄種を厨
 立出る甲斐松前氏
 和助が傍同
 貴殿の手
 下も及
 せぬ傍
 輩の神波が
 身のけつ
 さんら構の役ハ彼
 任うせん神波は出ませと云ふ下り三左門舞巧



痛く死す折こしその日もすてふを掛ま
 今日ハ是まよと和助ハおれの守が禊りて
 立てこそ松前と俣小原田が屋敷と立出て
 己が宿所へ入りや蹴小残一兵部甲斐
 三左門も謙らに猶も悪事を語り
 酒うち飲居りしが三左門
 が言さるや義て覚語は志
 ありとも和助がこびのや
 ありて彼松前め小押られ今
 ひとやの苦敷住居誠ふくいそ
 うてと云ふ
 酒も飲
 中々の今
 夜私田村の屋
 敷忍びおれ
 和助小達て



伊達

伊達



三左門ト思ふに高声コレ和助よ今宵忍んで
 来よ我今度生捕きて牢屋の住居助け
 事も助けらまは酒でも賣て飲せよと申
 斐どん申上頂いで来よ酒肴の旨
 うさや晴せと云ふ荒木は涙を流し
 弟多とて頼母い兄弟の親切死
 もあらア忘さぬと私語を
 捨子の間より酒と肴と中
 入もトイヤヤら
 夫庭か

松前鉄之助
 四五杯だけ飲ぶ呑
 べて実小甘露の
 味かきると喜ひ

隠岐守

荒木和助



飲らふ和助
 腹を押し空腹
 強せ胸を
 来よと云ふ
 斐どん申上頂いで来よ酒肴の旨
 うさや晴せと云ふ荒木は涙を流し
 弟多とて頼母い兄弟の親切死
 もあらア忘さぬと私語を
 捨子の間より酒と肴と中
 入もトイヤヤら
 夫庭か

伊達兵部

原田甲斐

丹



キ七轉八倒目を見たり虚
 空をうらみ悲しき思を
 つたふまをりこり三右よ
 己と殺すうと妻とのま
 せしおとろせ死ぬ我が命
 妻のめと毒とあはして呉
 りと言きて神浪頭や
 かりてさう思ふ心取もさ
 あらア夫ふ知らぬとフム
 讀み雅推ひふら江原田甲
 妻おやの口く思事う浅
 えて身の上と親切めば
 て己をまふと我小毒を
 とるののしとを打聞
 息木和助夫で様子か
 知まてとあなを恨む



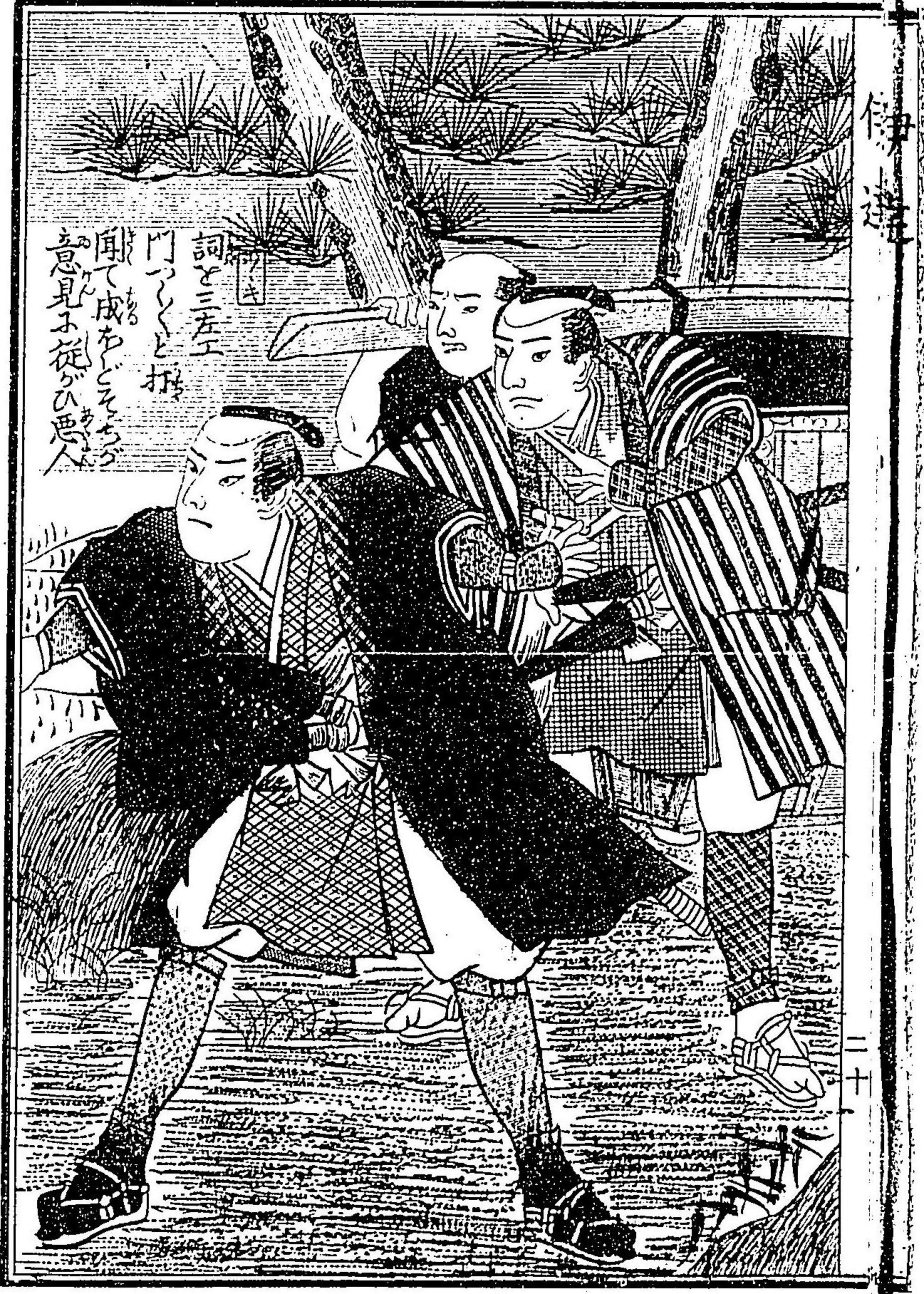
助の和
 不立婦
 と本心
 念を訴
 大恩の
 御子の
 殺すに
 大罪な
 思ふは
 死ぬると
 かの毒酒
 おとせね命を
 心とひのく
 心を我
 とはと原田
 殺される
 心とひのく
 心とひのく

日やアおん死貴巴が
 御子の御手木
 作



伊達

二十一



伊達

二十一

詞と三左
門つくと振
厭て成ちとそち
意見お従ひ悪人

△安藝を始むに倉
小十郎其池四八高
の役人江戸表小悪人
とびり奸黨と忠臣
と二派小多きて一藩の
互い小方向と定めて
用目立しるるの
事若あつての事ゆが
亀千代君と守護して
奸黨と戦ひとひき圖
元和久屋の城お立ち
一戦おさんと血氣の若者
先暫くと押とめ兵部
甲斐とあひとり恐ま
多るも公儀頼ひ出御
裁判と受の上とと



キツ
拳力
遅きふ非は夫
批者か欲く方の物作小江
表出府て覽るもも裁許
と仰ぐんと伊達安藝今出
谷いげもと思ひ爰小相さん

○せしが悪人
此度安藝今出
△出府
△途中
小あて
あんさん
世後の
めんと
諸國無
来のあられ
もの数多る
海道筋ふ待伏しと聞
素より思慮深き安藝今出

安藝



内膳正

合此事と興の切株ゆき早く水車
如くふ打多し浪人ともせし人
間ふ打ももまやコレヤ
跡と見おして遊
跡一通落ち
甚五兵衛
手取上
此書物

おれいなる手術小のる死
じまの町人ふ姿をやつ
東海道より出府さなり
未物お血氣の若者と衆
せ身代りつるも浪
州鑑掛が原小十四五人の浪
入が声より立ちこの内多
の陸國和久屋に伊達安
藝殿と見受さる願の筋
あり速ふらと出ま
呼ぶるり推さの過
り伊達安藝今出
對面せんとのこの
と聞ひてあ
いで安藝今
御ひい合



大庭 道益
毒藥を甲斐が
頼んまよふ一通
コリヤよものかまふ
へりらと懐中
はいて衆物と
早めて

安藝

田甲斐公
奉行
少捕頭
連兵部
見る伊
府を後
戸表出
安とら江
件と町人
谷易あ
△その余の者と被告あり
廿四ヶ条ハ目案を立公儀
お訴ふ及ひける事の本と
尋る兵部の長男市正の
向方公時徳川大政府の
大老酒井雅樂守の息女
をんか上向大老の
取締ひの方との
本家と押領を
の企望を



せよと異見され
たる善ある詞小心
と勵はしその夜甲
斐が寝間小忍び入
謀叛の企て小味せ
連判状と盗
透電
体おろせし
足小任せて一生
懸命水戸夜道
より昏夜を分
す本國より急行
伊達家の國家老伊達
宗茂家國ふらる一大事。

伊達



伊達家安穩治人と余との調役板倉内膳正大老雅樂守の
 前面とてり理と推して論と極り天地を見抜く板倉が明智の
 敵をさすす好智の原田甲斐も兼ての巧も水の泡安藝
 次下神浪かこも一舞や声高くその證拠人此野不
 あり甲斐とん暫くおひまはんとひアス
 り来る体みきと驚くひひまると許
 ちも下賤の身として老中方の御列席の
 場野へ出る推察の下りからうと安
 藝の詞板倉殿の声掛ひひ苦敷い
 證拠の趣き思ひ申せじとある
 神浪はと甲斐とん此あつた
 争の柵おは此
 神浪が此場と洗ひ
 淡ひぶちまんと證拠の麻言上此既小負六事とある



○時斗がテシク早退
 出の時刻ありと其日の
 調は是より果てさ
 或時ハ評儀といひ
 或時ハ時斗と狂調
 一の時とちめをじて
 罪ハ伏さけりけり
 夜兵部ハひそく女中
 奥不打来りて雅樂頭
 の邸に至り密談ハ
 よびける其翌日板倉
 内膳正ハ松平安藝
 守ハ江戸へ出府せし
 上使として所殿の邸
 小遣大老の雅樂頭
 ハ急ム伊達家の

人々を評定内呼出り自ら出り抜き吟味
 小悪らんと巧きそ 雅楽頭より上殿不坐
 己が自序の裁断をきんと彼是安藝と聞
 既証抄の書類を取上げ失んとす
 折柄彼方より高き書類を差
 出せと暫くおとと言つ襖を
 押ひきまわつくと出来る
 板倉内膳止雅楽頭を
 め並居る人々一礼を
 座不付く諸言や今日
 安藝守館上使の
 役め滞り多相済
 歸途中承承れ
 伊達家の吟味と
 開かれ御身不
 肯ち板倉内

内膳正



伊達安藝
 人との恐れ
 あり以後の急

膳の一件の調役拙者
 一應のお断りも
 候令御大老の職
 せよ不時の吟味
 得られし此美
 と謹言
 雅楽頭も
 返答小困
 体と見てる内膳
 こま上様の上意
 小出とあんと推

雅楽頭



金立工

百田甲斐



雅楽頭が疎相の
 ありて火鉢を
 ぐもせ跡まで水
 りけ論日れを今日出
 抜一は只とあぢら
 ざるのと明一せねど
 情のあて解ても解ぬ
 安藝とすると平伏せ
 内膳ふつひ安藝ふむひ先
 目落善あるまよとて甲斐の意
 病ふ今日まで延びせり今日の日
 非ともらくきききんとしやの毒ふ
 伊達安藝の正と邪とのひ雪を運
 と矢小任せて言ひつらんとすると
 ても教多の程松の六罪ふ伏せよ
 原田甲斐腹罪をとら思ひも依らる

作

三十一



証状とて書物も書きたる偽筆
 とり板倉公申上され
 あまある書物
 偽り真書
 合御吟味
 顔ひ上まり
 とふふを
 安藝八打
 消て書風を換
 ハ心のまづ去る
 言辭出来ぬは故に天印
 を様の事もあはんと拙者
 真の宛印ハッ書畫を除き真書と
 とい内膳威儀と正一原田甲斐
 兼いそその宛印とての者ハ身かゝる大事の
 品然るとい書省くと印ハ五体より一が

甲斐

三十一

三十一



〇 身体と無理に不身不身の同ん
 人を偽るといふと我が一ツの畫と
 兼てよりの
 ぞき置とふ
 馬鹿げものか
 何を思ふやうふ
 くと向落せん
 流石の
 甲斐
 口おす掛
 悪教持病の癪をじ
 あつて願ひまする
 聞届るゝ武士の情け
 皆々立てやく御安
 藝もね一ツと引とり

内膳
 萬々歳吃度安泰不斗らひもさ
 安堵せせと情の一言安藝六苦痛と



体息あせかる所襖のそとわて安藝不
 付添の人々お御大老が御用ゆと呼ぶ
 まく蜂谷を立てゆく引遠へて原
 田甲斐いづくはてや隠し持らん
 短刀引抜きおどりこき安藝か
 腹腹クサト突きさへんげりあふ
 一ト声全員の安藝素素
 強氣の老功者扇子の
 持て無言の何りひ蜂
 谷はそれと見ゆるや
 馳来て原田甲斐小六手
 細曲者ありと呼んぬを
 の若武士原田甲斐を取り
 こそ遂に縋とて掛りける
 板倉の葉湯をあきり手負の
 安藝小被下汝が忠死の次第ハハハ

伊達安藝
 息絶り

御届 明治二十年八月卅日定
 編輯兼 日本橋區龜井町廿五番地
 出版人 澤久次郎

